

Let's know Hiroshima Castle.

# しろうや！広島城



No.85

## 厳島神社管絃祭と御供船 ～江戸時代の賑わいに思いを馳せて～



大鳥居の下を通り、御座船へ向かう御鳳輦（2024）

### 厳島神社管絃祭

管絃祭は、毎年旧暦6月17日に行われる、厳島神社の祭礼行事です。日本三大船神事の一つに数えられる祭りで、その由緒は平安時代まで遡るとされます。華やかに飾り付けられた御座船が、管絃を奏しながら宮島と対岸の地御前神社（じごぜん）を行き来する様子は優雅で美しく、ぜひ一度は実際にご覧いただきたい祭事です。祭りの終了は日付が変わる頃になるため、最後まで見届ける場合は、宮島での宿泊がオススメです。筆者は2024年と2025年の2回、管絃

祭の日を宮島側で過ごすことができました。今回の「しろうや！広島城」では、その際の写真とともに、祭りの概要をご紹介します。

祭りが執り行われる旧暦6月17日は、一年のうちでもとくに干満の差が大きい時期（大潮）にあたり、祭りの進行にも潮位の変動が深く関係しています。当日の神事の始まりは16時、厳島神社本殿での「発輦祭」（はつれんさい）です。ここで御祭神の御分霊（みわけ）を御座船（みまふね）にお遷し（うつ）する儀式が執り行われ、神職（かみ）や楽人（がくにん）、関係者が厳粛に参列し、海上への神幸に向けて準備が整



長浜神社鳥居と御座船（2025）



大鳥居をくぐる御座船（2025）



客神社と御座船（2025）

えられます。このとき、海は干潮。御分霊をのせた御鳳輦は、御本社の先端にある火焼前<sup>ひたさき</sup>から海へ下りると、大鳥居をくぐり沖で待つ御座船へ。御座船では、大鳥居前の儀という神事を執り行った後、管絃を奏しながら対岸の地御前神社に向かいます。

途中、火建岩<sup>ほたていわ</sup>沖で一時停船し、潮が高くなるのを待ち、潮が満ち地御前神社前に御座船が入れるようになった頃に、地御前神社からの御迎船を水先に、地御前神社前へ。到着後、浜辺で祭典と管絃が奏された後に、御座船は三匝<sup>そう</sup>（三回廻ること）し、宮島の長浜神社へ向かいます。※筆者は厳島神社で御座船を見送ったため、この場面は実際には見る事ができませんでした。

20時半頃、長浜神社では、「ちょうちん行列」に参列<sup>ちようちん</sup>する人々が提灯<sup>とも</sup>の灯りとともに御座船を出迎えます。たくさんの提灯が灯された神社周辺では、夏の祭りらしい雰囲気味わえます。長浜神社の後、大元神社で神事を執り行い、御座船はいよいよ御本社へ。この時点で時刻は真夜中近く、潮位は最高位に近づきます。月明かりの下、提灯や篝火<sup>かがりび</sup>の灯りに照らされながら進む御座船が、大鳥居の真下をくぐり神社へと還御するさまは、とても幻想的です。神事のクライマックスでは、回廊と摂社<sup>まろうど</sup>の客神社に囲まれた「杵形」<sup>ますがた</sup>に入った御座船が、管絃を奏しながらダイナミックに三回廻の様子を見ることができます。その後、御座船は火焼前へ着岸。御鳳輦が本殿へ入り還御祭が奉仕され、御祭神がお戻りになると、管絃祭の幕が静かに閉じられます。

以上が大まかな管絃祭の流れになりますが、今のような御分霊を乗せた御座船が海を渡る形になったのは、明治15年（1882）のことです。それまでは、「管絃船」が管絃を奏しながら周辺の神々の社を巡る祭事であり、「船管絃」と呼ばれていました。船が進むルートも現在とは異なり、長浜神社の次に御本社、最後に大元神社という順番でした。また、江戸時代には神仏習合であったため、管絃船の飾りには盆灯籠のようなものが釣られるなど仏教色が強く見られ、船上には神職とともに僧侶の姿もありました。このように、管絃祭は時代によって形を変えてはいるものの、現在まで続けられている伝統あるお祭りです。

### 管絃祭と御供船<sup>おともんぶね</sup>

さて、管絃祭の長い伝統のなかで、今以上にこの祭事が盛り上がりを見せていた時代がありました。それが江戸時代、御座船（当時は管絃船）の御供をするたくさんの「御供船」が、海上を埋め尽くした時代です。

現在、御座船は広島市中区・江波（1隻）と呉市・阿賀（2隻）から奉仕する、3隻の小船に曳<sup>ひ</sup>かれています。阿賀と江波が御座船（管絃船）を曳いて航行するようになったのは、元禄14年（1701）、阿賀村と江波村の船が、暴風雨に見舞われている管絃船を力を合わせて救助したことがきっかけと言われています。その後、正徳元年（1711）頃に、広島城下・紙屋町の釣燈屋三代目市兵衛が、厳島神社の依頼に



より、管絃船が濡れるのを防ぐための雨具を寄進しました。以後、紙屋町から「雨具御用船」を出し毎年管絃船の御供をするようになったのが、御供船の始まりです。こうして紙屋町から始まった御供船ですが、享保・元文年間（1716～41）には他の町々も紙屋町に倣って船を出すようになり、元文の頃には、その数は100艘に及んだといえます。船の飾りは京都・祇園祭の山鉦の装飾を真似、笛鼓の囃子も祇園囃子を参考にしたと言われ、あたかも川上の祇園祭の様相を呈していたようです。しだいに各町で華美・奇抜さを競い合うようになり、船上に楼台を構えたり、見送幕（<sup>ともかざ</sup> 艦飾り）を張ったり、提灯や吹き流しを立てるなど、趣向を凝らした御供船が集まるきらびやかな風景は多くの見物人を集め、城下の夏の一大行事となりました。



豪華絢爛に飾られた御供船  
（「六月十七日夜芸宮嶋御祭礼之図」広島城蔵）

年々華美になる御供船は、安永7年（1778）からの一時期、藩の規制の対象となり船飾りや囃子が禁止されたこともありました。しかし、城下の人々の御供船への熱狂を抑えることはできず、寛政7年（1795）に規制が解除されると、江戸時代を通じて祭りを盛り上げました。明治時代には、各川に架橋が進んで橋下が低くなったため、飾り立てた御供船の通過が困難になってしまい、船は宮島へ渡ることなく、川に停泊した状態で人々の目を楽しませるようになりました。その後、昭和初期までは京橋川、本川で御供船が毎年飾り立てられていたようで、薄田太郎は『がんす横丁』のなかで「浮城のようなこ

の船の美しさ」と、当時の印象的な光景を語っていますが、原爆投下を経た現在では、残念ながら完全に姿を消してしまいました。

※管絃祭と御供船については、「しろうや！広島城」31号で詳しく紹介しています。バックナンバーは広島城のホームページからダウンロードできますので、ぜひこちらをご覧ください！

## 新発見！伝京橋町御供船の艦飾り

現在は見ることのできない御供船ですが、令和6年（2024）、これに関連する資料が、新たに広島市に寄贈されました。縦約2.8メートル、横約2.5メートルのひじょうに大きなもので、御供船の船尾（艦）を飾るために用いられた「艦飾り」と呼ばれる懸装品（<sup>けそう</sup> けそう）です。明治末期に撮影された絵葉書に、この艦飾りを掲げた京橋町の御供船が写されていることから、京橋町のものでほぼ間違いないと考えられます。

赤色の布地に五条橋に立つ弁慶の勇猛な姿を金銀糸の刺繍で表し、<sup>なぎなた</sup> 薙刀や刀の柄には金属、弁慶の目にはガラスと、別材を取付けて立体感を生み出す斬新な手法で製作されています。



御供船の艦飾り（広島城蔵、中道豪一氏画像提供）

裏面の墨書から、この艦飾りは、安政4年（1857）に大阪で製作され、その後明治42年（1909）に京橋町の実業家・保田八十吉らが寄付金を集め、広島市大手町の縫師・岡野藤兵衛の手で新たに縫い直し

れたものであると考えられます。御供船の歴史のなかで、この艦飾りが使用された時期は、宮島への渡海から川の上でのお披露目に移っていく、ちょうど過渡期にあたります。御供船の懸装品の実物資料は他に例がなく、戦前の広島市域における管絃祭の賑わいを伝えてくれる、たいへん貴重な資料です。

艦飾りは、現状、年月の経過による傷みを修復するため、京都の工房に預けられています。修復には3年程の時間が必要になりますので、新たにオープンする三の丸歴史館で、修復後の姿をお披露目する予定です。楽しみにお待ちください！（吉田 文）

## コラム これからの広島城 広島城資料収集等の基金の設立について

### 広島城資料収集等の基金について

広島市では、広島市の歴史・文化や広島城の歴史を伝える貴重な資料を収集・保存しています。これらの収集した資料は、現在整備を進めている広島城三の丸歴史館で展示して一般公開するとともに、調査研究し、地域の歴史・文化の理解を深め、継承する取組を行うこととしています。

こうした取組を推進し、継続していくために、令和7年4月1日に「広島城資料収集等基金」を設立しました！ この取組を支援して下さる皆さまからお寄せいただく寄附金を積み立て、資料の収集及び適切な保存に必要な修復に活用していきます。

この基金を活用した最初の取組として、今回の紙面でも紹介されている御供船の艦飾りも、この基金の活用により、約3年かけて修復することとしています。

今後も、基金を活用して資料の収集及び修復等を実施した場合には、皆さまにご報告させていただきます。

### はじまりの天守 つなぐ広島城三の丸歴史館

昭和33年（1958）に再建され、広島のみちを見守りつづけてきた現在の天守は、博物館として長く多くの方に親しまれてきましたが、令和8年3月22日に閉城します。

閉城に向けて多くの方に来ていただけるよう、関連するイベントやセレモニーを企画することとしていますので、内容が決まり次第、広島市のホームページ等でお知らせします。

収蔵資料等は、天守閉城後、令和8年度中に開館予定の広島城三の丸歴史館へ移ります。新しい歴史館は、近世広島市の歴史・文化や広島城の歴史を紹介する展示、体験コンテンツなどがあり、様々な年代の方々に楽しんでもいただけるよう整備を進めています。

閉城までの期間はあと少しです。より多くの方に広島城天守に会場していただき、現天守を記憶に残していただきたいと思います。

（広島市市民局文化スポーツ部文化振興課広島城活性化担当）



広島城三の丸歴史館イメージ

しろうや  
！  
広島城

#### 編集

公益財団法人広島市文化財団 広島城  
〒730-0011  
広島市中区基町 21-1  
電話：082-221-7512  
FAX：082-221-7519

#### 発行

広島城アソシエイツ

令和7年9月30日発行

#### 広島城利用案内

開館時間：9：00～18：00

（12月～2月は9：00～17：00）

入館の受付は閉館の30分前まで

観覧料：大人370円（280円） 中学生以下無料

高校生相当・シニア（65歳以上）180円（100円）

（ ）内は30名以上の団体料金

休館日：12月2日、12月29日～31日（臨時休館あり）

ホームページ：<https://hiroshimacastle.jp/>

「しろうや！広島城」のバックナンバーは、広島城のホームページからダウンロードできます